

学校の「当たり前」をやめた

公立名門の麴町中学校

鶴岡出身の工藤勇一校長

『学校の「当たり前」をやめた。生徒も教師も変わるー公立名門中学校長の改革』工藤勇一著 2018年12月25日発行・時事通信社、が版を重ね、大きな反響を呼んでいます。



よりよく生きていけるようにする「ため」にある。

そのためには、子どもたちには「自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する資質」すなわち「自律」する力を身につけさせていくことだ。

社会が目まぐるしく変化する今だからこそ、この「教育の原点」に立ち返らないといけない。

今、学校は「自律」を育むことと真逆のことをやっている。

「自律」できないまま大人になり、何か壁にぶつかると「会社が悪い」「国が悪い」と誰かのせいにする。

理想と現実のギャップに嘆き、自暴自棄になっっている若者もいる。なぜ、そのようなったか。

一言で表せば「手段が目的化」してしまっただから。

教育の手段である学習指導要領や教科書が「目的」となり、消化してこなす対象となっただ。

「服装指導」などは、「何のために」という目的もよく考えず、「規

則」を守らせるために一生懸命になっっているが、教育の優先順位から考えて上位に位置づけられるものなのか。これらの指摘が導入部で語られています。

学校教育の創造

そして麴町中の5年間に、「学校の当たり前」をやめて、新しい学校教育の創造にチャレンジした「すごい中味の本！」です。

宿題はただ「こなす」だけになっていないか。

宿題は、分かる生徒はムダな作業で、分からない生徒は重荷。

学習は「できない」「問題を」できる「ようにするプロセスでない」と意味がない。

中間・期末テストなどの定期考査は、成績をある時点で確定させることで意味はない。

一夜漬けの悪癖がつく弊害も小さくない。

定期考査をなくし、代わりに単元テストを実施し、すべての生徒が単元内容を確実に習得して前に進めるようにする。

固定担任制を廃止して「チーム医療」型の「全員担任制」を採用し、教師全員が個性を活かし合う学年運営に変える。

新たな取り組みとして、社会とシームレス(継ぎ目ない)な問題解決型カリキュラム、ノートづくりと「フレーム」活用、ビジネス手帳でスケジュール管理、明確な目的を持った宿泊研修、旅行会社

とタイアップした企画型取材旅行、答のない課題に取り組む教育、法律を考える「模擬裁判」、全国にないほどのアフタースクール(放課後の学校活用)……。

最後の方で、「世の中はろくなもんじゃない」「大人になんてなりたくない」と感じている子どもたちが多いと心配だ。

すべての子どもたちが「世の中ってまんざらでもない！大人って結構素敵だ！」と思える学校が最上位の目標だ、とあります。

藩校「致道館」

工藤氏は「民間人校長」ですか、と間違われるそうですが、1960年鶴岡市生まれで、旧飽海郡松山町の松山中で4年間教師を勤め、東京で教員採用試験を受け直しました。

東京都公立中学校教員、東京都教育委員会、目黒区教育委員会、新宿区教育委員会教育指導課長等を経て、2014年から現職。教育再生実行会議委員、経済産業省「未来の教室」とEd Tech 研究会委員等、公職を歴任されました。

本の中で、鶴岡には江戸時代の藩校「致道館」があり、そこでの教育は子どもたちが自身の意思で決定することを重視していた。

「自律」を何よりも大事にする価値観は、鶴岡での日々を通じて培われたものかもしれない、とあります。

東京都千代田区立麴町中学校は皇居近くにあり、国会議事堂や最高裁判所、首相官邸があり、日比谷高校が東大合格者を毎年200人近く出していた時代に、麴町中はその日比谷高校へ毎年50人以上も進学させる超進学校でした。

超名門の中学校で、「服装頭髪指導は行わない」「宿題を出さない」「中間・期末テストの全廃」「固定担任制の廃止」など、公立中学校でここまで改革できるのかと、常識がひっくり返る思いです。

宿題は必要ない

本の扉には、『みんな仲良く』と教室に掲げても、子どもたちは

「教育の原点」

学校は何のためにあるのか。

それは、学校は子どもたちが「社会の中

インドで教育と農村開発に取り組む三浦照男さん

北インドのアラハバード近郊の貧農地帯で、学校開設や農業指導に従事している三浦照男さんを迎えて13日、荘内教会で現地報告を聞く機会がありました。三浦さんは鶴岡高専の卒業生で、栃木県のアジア学院で留学生の指導に携わり、25年前に藤島での留学生の研修のキツカケをつくった人でもあります。

三浦さんはインド滞在14年になり、カースト制度の身分固定化で学校に行かない女性や子ども達が、教育を受けられるよう活動を続けています。



日本の大学生を対象としたインターンシップ研修も実施し、インドの宗教や食料理、貧しインフラなど、異文化を体験して価値観を大きく変えた学生の声

だまされては遺憾!

「逆コース」の日本と下山・三鷹・松川の謀略事件①

青山崇

も紹介しました。

インドから見れば異邦人である三浦さんが、困難を抱えながらも受け入れられているところに、この国の魅力があるようです。

3月5日から10日間、現地ツアーを実施予定で、荘内教会が窓口になっています。

戦後間もなく、戦争から平和、人権を大切に

にする圧政の解放者・アメリカという風潮が日本を覆っていた。

そのアメリカが、中国の社会主義化、東南アジアの民族独立の高まりを恐れ、日本を東アジア反共体制の安定した要石とするため、平和・民主のポツダム宣言を投げ捨て、新憲法も無視し、盛んになつてきた暮しを守る労働運動、日本共産党を弾圧し、職場や公職から追放するレッドパージ、警察予備隊を設置し再軍備への道など「逆コース」を進み始めた。

一方並行して、世界的に米ソ超大国の政治・軍事的対立である「冷戦」が始まつていた。

1946年後半から盛んになつた労働運動は、1947年2月1日、すべての労働組合が一斉に行う「ゼネス



中止をせよと主張する伊井弥四郎議長

ト」を企画していた。連合国軍総司令官・マッカーサーの指令で中止させられた。しかし労働運動は衰



再軍備反対

憲法は国の未来、そして国の理想を語るものでもある。とは、首相の年頭会見の一節である。その通りだと思

いますがダ、そう言いながら憲法を変えたいと言っている。年頭から変じやないですか。

武器を買う。これが防衛費と言つて5兆円を大きく超えるものになつている。それは、高齢化に伴い、当然大きな社会保障費を削つての仕事なのだ。

▲かつて睨み合つていた国境は現在、誰でも行ける観光地になつていると写真がありましたよ。去年歴史的な米朝の握手。平和な朝鮮半島の実現のため、近く2回目の首脳会談が予定されているとトランプが発表したでしょ。

▲こんな時、新たに百機をこえる戦闘機が、何故必要なんだヨ。平和への流れから、アメリカでもいらぬから買えと言われたんだろ。耐用年数が30年というもんだと云。

城貞 (藤の花)

飲酒

其の一

銭の酒を沽うありて 鯉魚 肥ゆ
 酩酊して還 醒め 是非を忘る
 老大 怠敖にして 丁壮に慙ず
 誰に憑つて 我が酔に 酔いて帰るを
 画かしめん

飲酒

其一

有錢沽酒鯉魚肥
 酩酊還醒忘是非
 老大怠敖慙丁壯
 憑誰画我醉醇帰

酒を買うお金はまだあるし、(毎日晩酌をしているが) おかずに鯉も肥えてきた。ひどく酔つ払つては又醒め、物事の是非善悪の判断を忘れてしまった。奇る年波とともに、怠け者になり、若い者に申し訳なく思つてゐる。酒に酔つた千鳥足の我が姿を、誰か画に描いてはくれぬものかなあ。

銭||お金。沽||かう。鯉||コイ。酩酊||ひどく酔う。還||又。醒||酒の酔いがさめる。是非||是と非。物事の是非、善悪の判断。老大||年を取る。怠敖||怠けて遊ぶ。慙||はざかしく思う。はじめる。丁壮||働き盛りの若者。憑||よる。たのむ。醇||濃い酒。

▲北朝鮮・中国の動きを利用して危険を煽り、トランプの言いなりに

備たせ。(石川)